

再臨のキリストによる
第3福音書

ヘルメスの杖・下

—大錬金術—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF

THE SECOND COMING No. 3

CADUCEUS second volume

I

SEIDOU
SEIDON

正道

目次

ヘルメスの杖・下	
第3福音書	3
座標9 アルベド	4
全体の目次	6
序 弁証法としての錬金術	7
第1章 空間的に見るアルベド (無限)	
(1) ヘン・カイ・パン	13
(2) 相違性が作り出す一者性	18
(3) 自他一体という救い	23
第2章 時間的に見るアルベド (永遠)	
(1) 時の付着物	29
(2) 現在という名の虚無	33
(3) 時間の真相	36
(4) 永遠の姿	40
第3章 永遠の諸相	
(1) 永遠の相似形	45
(2) 時の所属	48
(3) 虚しさからの救済	51

ヘルメスの杖・下

第3福音書

再臨のキリストによる
第3福音書

ヘルメスの杖・下

——大錬金術

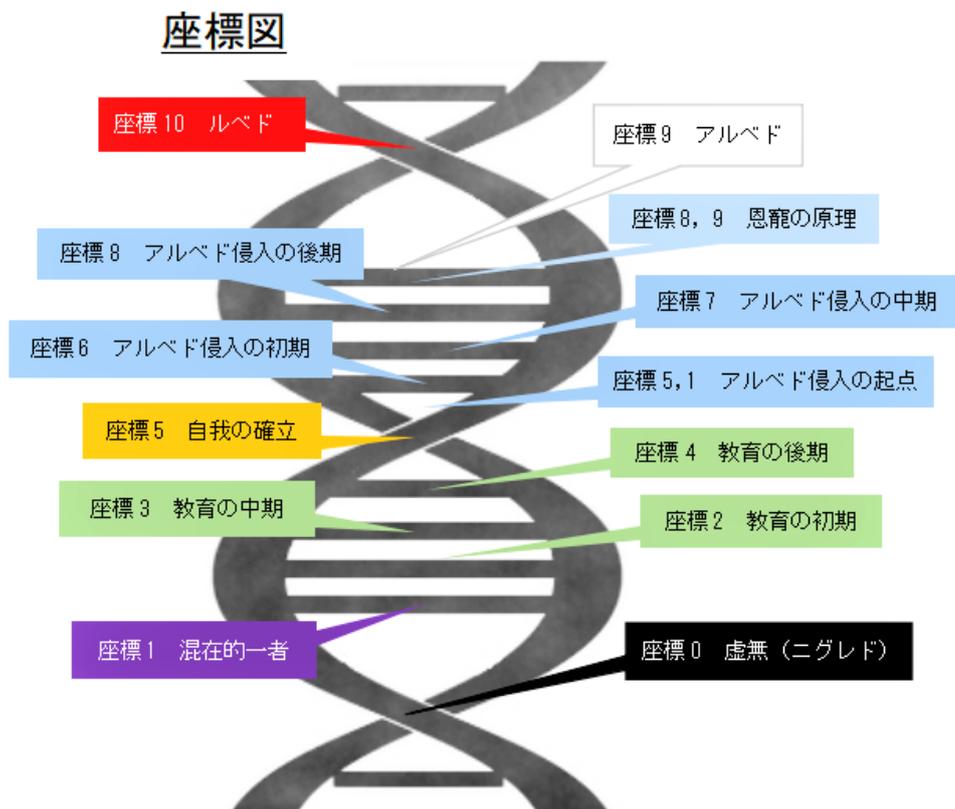
私たちは神秘的状態を和解的、統合的な状態として感ずる。

神秘的状態は、私たちのうちにある否定の機能に訴えるよりは、むしろ肯定の機能に訴える。

この状態においては、無限は有限を吸収して、平和のうちに有限との交渉を絶つのである。

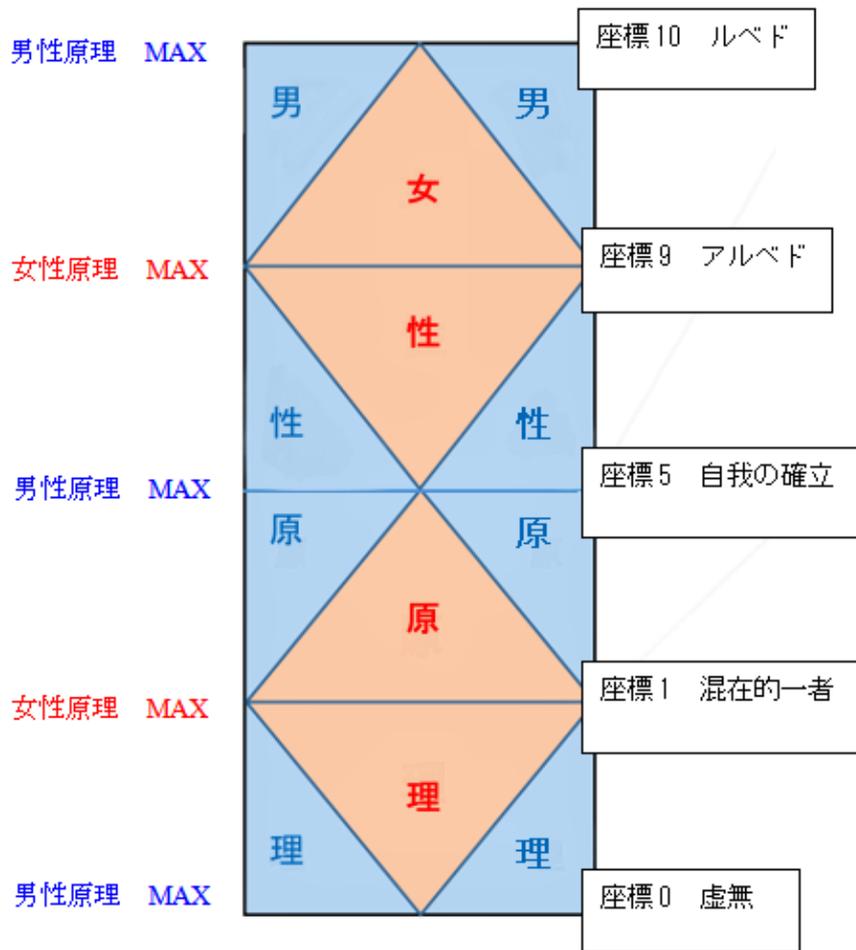
W・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』梶田啓三郎訳より

座標9 アルベド



2022-05-26 \ (4 \).png

原理図



2022-05-26 \ (7 \).png

全体の目次

序 弁証法としての錬金術

座標9 アルベド

- 第1章 空間的にみるアルベド
- 第2章 時間的にみるアルベド
- 第3章 永遠の諸相
- 第4章 時空的に捉えるアルベド
- 第5章 倫理的にみるアルベド
- 第6章 マリア、イエス、パウロ

座標9～0 帰還と下降

- 第1章 アルベドについての追加考察
- 第2章 アルベドからの帰還と下降

座標0 ニグレド

- 第1章 虚無というアンチテーゼ
- 第2章 ディオニュソスの宗教
- 第3章 虚無による一致

座標10 ルベド

- 第1章 クレアティオ・エクス・ニヒロ
- 第2章 ジェネシス（創世記）
- 第3章 暁の太陽の真理
- 第4章 アルベドとルベド
- 第5章 神に干渉する人間像
- 第6章 人間＝神、神＝人間
- 第7章 神と黄金

序 弁証法としての錬金術

錬金術の正反合

これから『ヘルメスの杖』は、上巻の「小錬金術」から、下巻の「大錬金術」に移行することになる。

巻を改めたところで、もう一度「錬金術全体の過程」を確認しておくことにしよう。

そのために、上巻の「分化から総合へ」で用いた、アンドレーア・アロマティコの文章を、もう一度ここで眺めてみたい。

ただし今回は、同文を「ヘーゲルの弁証法」というフィルターを通して眺めてみたい。ヘーゲルの弁証法とは、正反合の流れ、あるいは、定立、反定立、総合、の流れである。

まずアロマティコの原文（種村季弘監修）は次のようなものである。

* まずカオス状態にある物質を手に入れ、それを純化し（中略）物質を形作っているさまざまな要素を分離し、分類してから、もう一度調和のとれた形で統一し直さなければならない。

これが物質を賢者の石に変える霊的作業である。*

これをヘーゲルの弁証法に当てはめてみよう。

正 まずカオス状態にある物質を手に入れ——定立としての「混在的一者」

反 それを純化し、物質を形作っているさまざまな要素を分離し、分類してから——反定立としての「自我の確立」

合 もう一度調和のとれた形で統一し直さなければならない——総合としての「アルベド」

これが物質を賢者の石に変える霊的作業である。

二つの座標の総合

上記のように整理すれば、アルベドが、「混在的一者」という定立と、「自我の確立」という反定立との“総合”であることが、分かりやすくなるだろう。私がアルベドを「総合的一者」と呼ぶのは、一つには、こうした背景があるからである。

さて「総合されている」ということは、そのうちに、定立と反定立の両要素を含んでいることを意味する。したがって、この場合は「アルベドは一者であることを保ちながら、そのうちに“分化した無数の自我”を含んでいる」ということになるだろう。

むしろ「自我確立の経験を持っている者が、混在的一者のような“一者性”の体験を持つと、それが“総合的一者”たるアルベドの経験に昇華される」と言ったほうが的確だろうか。

すなわち、自我の確立を経ていると、本来あいまいなはずの“一者化体験”の内実が、クリアーに、詳細に見えてくるということである。彼が見れば、一見茫漠たる眺めの中に、やがて無数の自我が浮かび上がってくる、そういうことだ。

もちろん、そうなるためには、「アルベド侵入」という、分化性と一者性を媒介する段階を、その前に踏まなければならない。そうした媒介の過程を持たないかぎり、分化性と一者性は反目したままだろうからである。

その点で私は、決して安易な話をしているのではない。やはり座標6, 7, 8, があってこそ、座標9アルベド、なのである。

いずれにしても、総合的一者の内実については、本文で詳らかにするつもりである。

アルベドは「賢者の石」にあらず

ここでは先行して、一つの修正を施しておきたい。それはアロマティコが、どうやらアルベドのことを「賢者の石」と呼んでいることに関してである。すなわち彼は、アルベド（白化）を想定しながら、

「もう一度調和のとれた形で統一し直さなければならない。これが物質を“賢者の石”に変える霊的作業である」と謳っているのだが、これは明らかにおかしいのである。

それというのも、賢者の石の別名は「赤い石」だからである。

そもそも錬金術には「赤化」という言葉が用意されている。それがラテン語で言うところの「ルベド」である。

それはアルベドの次の段階にして、錬金術における最高の段階である。私の「ヘルメスの杖」においては、座標10として扱われている真理だ。

しかもルベドは、その内容が、結晶のような中心点を持っている。まるで石英（石）の結晶のような。したがってルベドは、象徴的に言えば「赤くて石のような真理」なのである。

古の錬金術師たちは、ここまでハッキリ言っているのである。であれば、ルベドをもっ

て「赤い石」たる「賢者の石」と規定しないのは、明らかにおかしいことだ。

どうせだから、ここで明確に定義しておこう。錬金術における賢者の石とはルベドのことである、と。

不滅の霊薬

他方アルベド（白化）の錬金術的象徴は、どちらかと言えば「エリクシル」であろう。エリクシルは白い液体であり、不滅の霊薬と呼ばれている。これを飲めば、その人間には永遠の命が与えられるという。

そして、アルベドを身体的寓意として捉えるならば、私は液体であるエリクシルを“母乳”に喩えずにはいられない。かつて「自我の確立」を、神の体の“ヘソ”と喩えた私としては、そのようにせざるを得ない。

なぜならアルベドは、人体に当てはめれば“胸の高さ”にある真理であり、なおかつそれは、霊的な母性の表れだからである。これは「恩寵の原理」を読めば明白であろう。

そして、母の胸から出る白い液体と言え、それはどう考えても母乳と捉えざるを得ない。するとエリクシルとは「霊的、神的な母乳」ということになりそうである。

そのことを想起させる丁度いいエピソードがあるので、ここでそれを紹介しておこう。

ミルクウェイ

ギリシア神話によると、女神ヘラは、乳児だったヘラクレスに、その乳房をギュッと掴まれたことがある。そのとき女神は、赤ちゃん時代のヘラクレスに、授乳をしてやっている真っ最中だったのだ。

何といっても、ヘラクレスは、のちに怪力の英雄となる身の上である。

ゆえに、たとえ赤ん坊であったとしても、その「ものを掴む力」には、きっと相当なものがあつたのだろう。柔らかな乳房を掴まれたヘラは、激的な痛みのため、ヘラクレスの口から、咄嗟に、自身の乳房を引き離してしまった。

この時、勢い余って、ヘラの乳房が大いに揺れたらしい。そして、そのように激しく揺れたため、夜空一杯にヘラの母乳（ミルク）が撒き散らされたのだという。

そして、かかる母乳が、ミルクウェイ（天の川）になったというのが、このエピソードの顛末なのである。

であれば、天の川とは、まさに「神的な母乳の現世的表現」ということになる。

よって読者にあつても、夜空を見上げ——プラネタリウムがお勧めだが——天の川の荘厳さを眺めれば、エリクシルの何たるかが“雰囲気として”伝わるかもしれない。

また、もともと水は、火（男性原理）と対照的な象徴である。つまり古来から、水は「女性原理の表れ」として慣例的に用いられてきたのである。

しかも、その水が白いというのだ。ならば、エリクシルをして“女性原理の最大表出であるところの”アルベド（白化）の象徴であると同定することに、異論の余地はないだろう。

今後の流れ

さて、アルベドは、小錬金術としては「総合」にあたっていた。つまり、混在的一者（定立）と自我の確立（反定立）を総合したものとして。

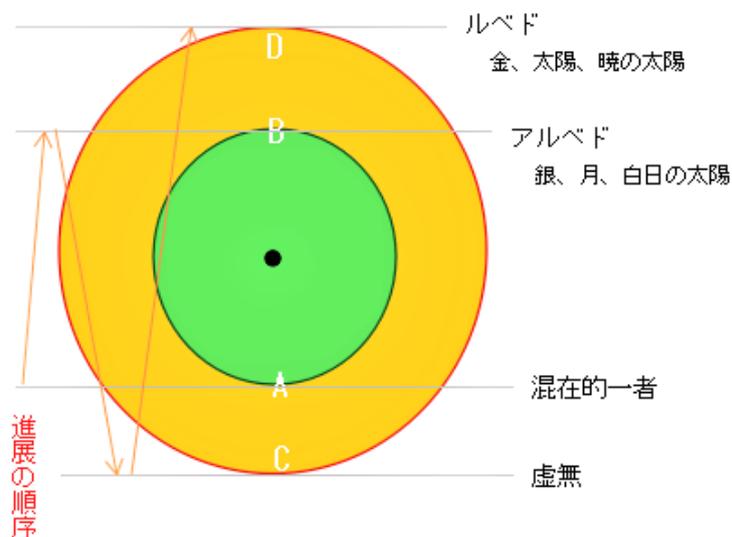
しかし、その同じアルベドが、大錬金術では「定立」となる。すなわち、弁証法における第一段階である。

その定立としてのアルベドが、今度は反定立としての「更新されたニグレド」を呼び寄せる。この更新されたニグレドは、またの名を「虚無」という。

そして、定立としてのアルベドと、反定立としてのニグレド（虚無）が総合されて、ついに「ルベド」が現出する。

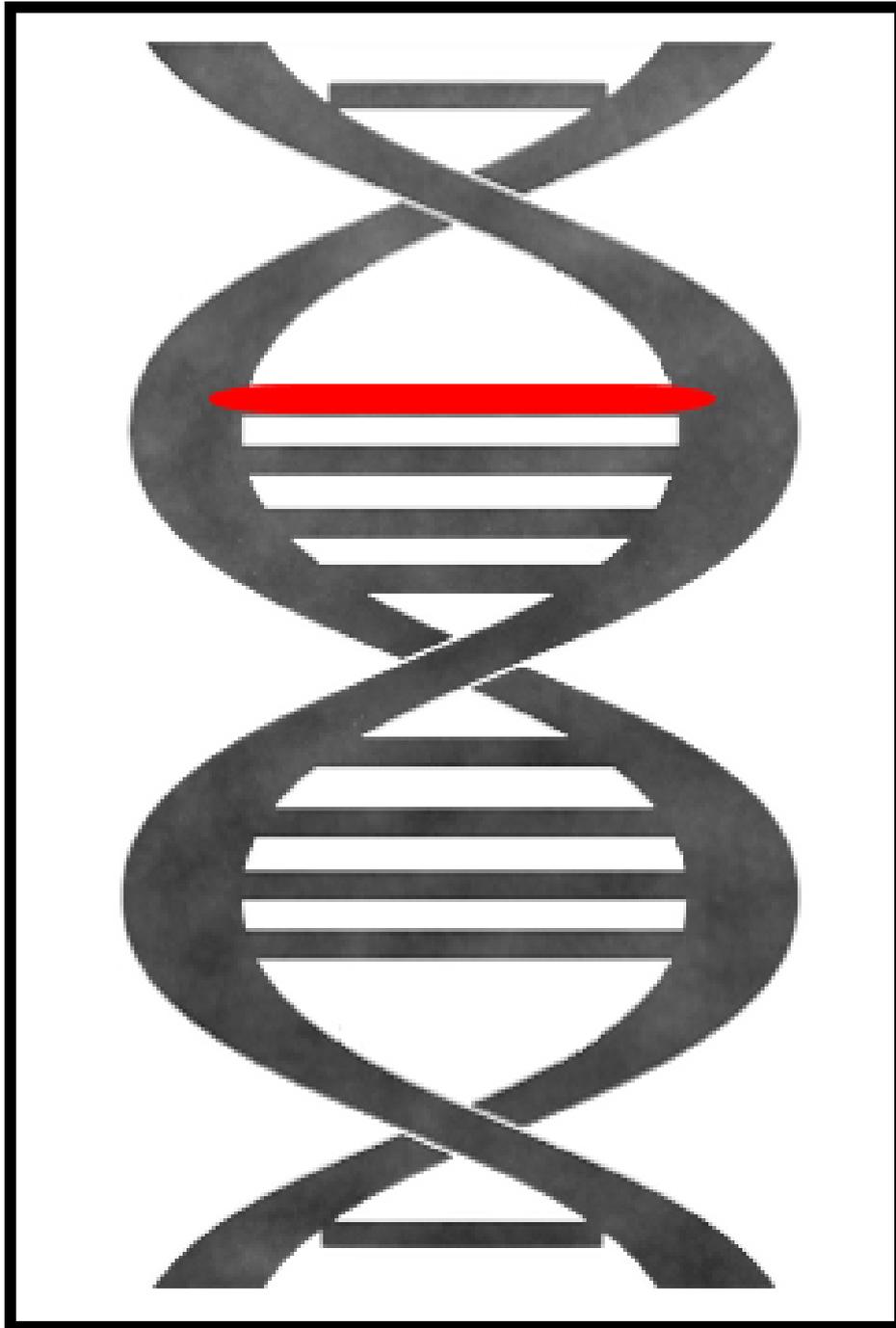
小錬金術でも「正反合」の流れがあったが、大錬金術で再び「正反合」が繰り返されるのである。ただし、より大規模に。

これが基本的な、本書「大錬金術」の流れだと言えるだろう。



第1章 空間的に見るアルベド（無限）

(1) ヘン・カイ・パン



2022-12-06 \ (4 \).png

恩寵の続き

では、座標 8, 9 の続きを話すとして。胎児化した主体と、霊的な母性原理の表出となったアルベドが、妊婦のように合一したあとの話である。

そのとき主体の心には、アルベドの内容がなだれ込み、彼の眼前には、これまで想像もつかなかった光景が現出することになる。

では主体はそのとき何を見るのだろうか？

まず空間的に見れば、それは「無限」である。そのときの主体の実感としては、宇宙の存在すべてが、彼の意識のうちに流入してくるような感じがする。

しかも彼の意識は、それを容易に受容できるほど、無制限に拡大してゆくのである。

ついには、宇宙の存在すべてが主体の心を満たす。事実、無限に含まれない存在はないので、そこには“全て”が含まれている。逆に、存在の“全て”を数え上げたら、それは「無限」と呼ぶしかあるまい。

ただし、その「全てである無限」は、同時に「一つのもの」でもある。

このように言うと、おそらく読者は混乱してしまうだろう。しかし「無限であり、かつ一つである」というこの矛盾性は、もっとも大切な、アルベドの空間的特質なのである。

無数に砕かれた一つの岩

喩えて言ってみよう。

一つの岩を砕けば、そのとき石が複数できる。その石は「一つ、二つ、三つ」と数えられる。

その複数の石を砕けば、さらに石の数は増える。礫（小石）と呼んでよいそれは、一応「何十、何百」と数えられるだろう。かなり骨は折れると思うが、それを数えるのは無理ではない。

しかし、こうした礫が“砂”になるまで、砕ききったらどうなるだろう。礫を砕いて、砕いて、砕きつくすのだ。そうすれば当然、砂の数は、どうにも数えきれないものになる。

この場合、計測者の“心理にとって”その数は、まるで無限大のように多く感じられることだろう。たとえば道端で一日中、歩行者の計測をされている者でも、無数の砂相手では、さすがにカウント計を投げ出してしまいうに違いない。

そういう意味で、そこには一種の「無限」が現出しているのである。

砂を集めた一つの岩

ところがだ。その無数の砂を集め、何らかの機器でもって圧縮したとする。すると、そのとき眼前に現れるのは、たった一つの「砂岩」なのである。

そこには難しい技術が必要になるかもしれない。しかし実際にその「砂を集めて圧縮する技術」を持っている者にとっては、無限大とも思われた砂は、たった一つの砂岩なのである。

そのように、無限のものをして「それを包括的に眺められるだけの視野」を持った者が眺めると、それはむしろ一つに見える。

つまりアルペド体験者にとっての無限は、そのまま“一なるもの”になりうるのである。

このことを、古代のギリシア人は「ヘン・カイ・パン」と表現した。「全にして一」という意味だ。

かかる「ヘン・カイ・パン」は、古代ギリシアを憧憬していたヘーゲル、シェリング、ヘルダーリンが使った合言葉としても知られている。

とくにヘーゲルが説いた絶対精神（神）は、無限にして一つの「アルペド的な神」であったと言うことが出来るだろう。

他の微生物を食べるアメーバ

もう一つ「無限にして一なるもの」の喩えの仕方があるとすれば、次のようなものだろう。

実験室に、小さなシャーレ（ガラス容器）があったとしよう。そして、そこに100匹の微生物が入れられているとする。これらの微生物は、当初なにごともなく自由に動き回っていた。

ところが、そこに新種のアメーバが一匹放り込まれた。このアメーバも、もちろん微生物である。

しかしこのアメーバは大変食欲で、他の微生物を、どんどん自分の体内に取り込んでいってしまう。つまり、もといた微生物たちは、みなアメーバに食べられてしまう運命にあった。

そうして、もともと「100匹の微生物とアメーバ」だったものが「80の微生物とアメーバ」となる。さらにそれが「50の微生物とアメーバ」となり「10の微生物とアメーバ」となる。その間、アメーバの体は、取り込んだ微生物の数ぶんだけ大きくなる。

そしてついに、アメーバが、微生物の“最後の一匹”を取り込んだとする。すると当然、そのとき容器の中にいるのはアメーバ一匹である。

その一匹のあとに数えられる“数”はない。しかし、その一匹は、もはや微生物とは呼ばれないぐらいの大きさになっている。アメーバは大いに太ったのである。

一の次に数えるべき数がない

アルペド体験者は、無限という規模で、このアメーバと同じことを行う。つまり、無限のものが主体の心に取り込まれて、ついには相対者がいなくなるのだ。

一人である彼の次には、もう数えるべき何者もいなくなる。彼は、自ら無限を呑み込んで一となってしまった。

もっとも、より事実に即して言えば「アルペドの座標には、常に、そういう『無限を

包括する一者性』が定在している」としたほうが正確だ。

しかし、そこに新参者として合一した主体にとっては、アルベドとの完全なるシンクロが果たされるまで、上述したような「吸収拡大ストーリー」を味わわなければならない、ということである。

そして実際に、そのような吸収拡大を経て、主体が、完全にアルベドとシンクロしたとしよう。すると、これによって、そこでは「主体である一者」だけがあって、その次を数えられる何者もいなくなってしまう。

そうだとすれば、主体は純粋な「一なるもの」である。一から先（二以降）を持たない、彼と並ぶ者を持たない、ゆえに相対するものを持たない「絶対的な一」である。

しかし、その一が無限と同じだけの重みをもっているのも事実である。だからこそそれは「無限にして一」とか「全にして一」という風に表現されるのである。

(2) 相違性がつくり出す一者性

別のものだけが数えられる

数字というものは無限に続いていくものである。十百千万億兆京……と、数の単位もまた気が遠くなるほど続く。

一応、単位として最後のものは「不可説不可説転」というものらしいが、その先にも、実際の数は限りなく続いていくことになるだろう。

しかし、そうした無限のものも、数えはじめは、身近な1, 2, 3から始まる。そして、このように数が数えられるということは、数えられる各々が「別のものである」ということを意味する。

つまり「同じ場所にある、同じもの」は、数として数えられないのである。これは考えてみれば当然のことであろう。

そして、そうやって「数えられる別のもの」であるということは、それぞれに相違性があるということである。

最も厳密に言えば、全く同じものでさえ、別の場所にあれば“違い”が生じる。物自体が同じものであったとしても、各々の物が触れている大気の種類は、多少なりとも違うものだからだ。

そこから大気を抜いて真空状態にしても、今度は量子レベルでの差異が見つけられるだろう。たとえば表面に当たっている光子の数だとか、ニュートリノの数だとか……

したがって、たとえ同じ品種のリンゴを千個集めたとしても、その中に同じリンゴは一つとして存在しない。それぞれが特有の相違性、独自性（個性）を持っていることになる。

混在による一者性

もちろん、リンゴ同士をすりつぶしてしまえば話は別だ。

リンゴ千個をすりつぶして大量のジュースにしてしまえば、そのときリンゴは、各々の独自性を失って、ただ一つのものになる。それはつまり「混在による一者性」ということだ。

そして、全く同じ文字を使っているだけに、それは座標1の「混在的一者」とよく似ている状態だと言えよう。

かかる「混在的一者」のことを、少しばかり振り返ってみよう。

その座標において、乳幼児である主体は、自分の行為の“すべての責任”を、泣いて喚いて母親に押し付けていた。

すなわち、主体の身に何が起こったとしても、その責任について彼は、まさしく“その全てが”母親にあると思っているのだ。だから面白くないことが起こると、少しも遠慮なしに、母親に向かって泣き喚くことになる。

また乳幼児である主体は、母親を自己生存の道具にしている。母親からの保護と助力なしで生きるつもりなど、彼には毛頭ないからだ。

これは要するに、乳幼児が、極度の“同一化”と“手段化”によって、自分の個性を、母親に混在させてしまっているということだ。

脱同一化と脱手段化が、自己責任を伴った「個性の確立」や「分化の極限」の指標であったとすれば、ここにあるのは、それとはまさに正反対の状態ということである。

話を戻すが、そのように、個々の要素を混在化してしまえば、いかなる多数であっても一つにすることが出来る。リンゴが何千個あろうとも、すりつぶして混在化してしまえば一つに出来る。

しかし、そのような混在の手段を用いないかぎりには——数えられる全てのものは、各々が独自性と相違性を持ってしまうことになる。

いかに数が大きくなろうとも、いかに無限大に近づこうとも、その点の事情は、何も変わりはない。

無限であるからこその一者性

しかし、アルベドにおいては、独自性と相違性を持った存在が、数えきれないほどある“からこそ”そこに一者性が生じることになる。それこそが「全にして一」の認識だからである。

むしろ、二つ三つと数えられる「少数のもの」が眼前にあった方が、ことの本质が見えづらくなるだろう。数えられたら、それはもう「一つのもの」ではないからだ。

それよりは、いっそ“数えきれない”無限の要素を眺めたほうが、主体には、よほどそれが「一つ」に感じられるものなのである。

それは、「数えきれない無限」にしても「次に数えるべき数がない1」にしても、それが「相対する何物も持たない」という点では、まったく同質だからである。

そして、相対するものを持たなければ、それは自ずから“絶対のもの”となる。

ことの本质は、ここにこそあるのだ。つまりアルベドにあっては、相対性を超えて、絶対性を獲得すれば良い、ということなのである。

主体はそこで「絶対的な無限」を、あるいは「絶対的な一」を獲得しさえすればよい。

これによって、アルベドでは、リンゴジュースのそれとは異なる一者性が実現されることになる。すなわち、一見すると実に厄介と思われる相違性を、アルベドの一者性は、「そのままの形で、すりつぶさず、混ぜることなく、わずかな苦もなく」

その「一つであること」のうちに組み込んでしまうのである。

混在的一者とアルベド

ここが、同じ女性原理の表れであっても、「混在的一者」と「アルベド」が、大きく異なっている点である。

比較すれば、まず混在的一者は「子供の未分化な個性が、同一化と手段化によって、溶け出している」状態にある。同一化と手段化の相手は、もちろん主体の母親だ。

そして、そのようにして現出するのは「その半溶解状態の子供の個性が、母親の強大な存在に取り込まれてしまっている」ような一者性である。つまり相違性をすりつぶした「リンゴジュース的な一者性」である。

それに対してアルベドは「分化した無数の個性の、その相違性を尊重したまま、同時に包括もしている」一者性である。

これを喩えれば「無数の個性的なリンゴを、そのリンゴのまま集めた一者性」ということになるだろう。

それは人類全員の個性を守りながら、絶対の一元的統治をも実現できる、政治理念の理想とも重なりあっている。

こうした理想状態がアルベドである。はじめに「混在的一者とアルベドを比較すれば」と言ったが、精神的価値からすれば、両者は当然比較を絶している。

つまりアルベドの一者性は、混在的一者とは比較を絶したところで、高々と聳え立っているのである。

絶対矛盾的自己同一

とはいえ、このようなアルベドの一者性は、心を無限の広さまで拡大していない者にとっては、単なる矛盾でしかない。

つまり「相違性が一者性をつくる」という文章は、自我的な立場から言えば、どう考えても、矛盾以外の何物でもないのである。相違性と一者性は、明らかに「真逆の概念」だからだ。

しかしアルベドにおいては、その真逆の概念が、確かに一つに総合されている。

このことを、日本を代表する哲学者である西田幾多郎は、実に妙趣ゆたかな言葉で表現している。すなわち彼は、正当にもそれを「絶対矛盾的自己同一」と呼んだのである。

事実アルベドの「全にして一」「無限にして一」という標語は、まさしく「自我にとっては絶対に矛盾している文章」である。

ところが同じそれが、自我の与り知らないところ（＝アルベド）では、何故か立派に両立しているのだ。

そして、それこそが、絶対的な矛盾が総合された、特殊な同一性状態——「絶対矛盾

的自己同一」なのである。

この言葉は、西田がアルベド体験者であったことの、証明書にもなるだろう。このような、真逆の概念が一つになるという「絶対矛盾的自己同一」を、アルベドを体験していない人間が気づくことは、まずないだろうからだ。

天は二物を与えない

ここで「アルベド侵入の後期」で語ったテーマを繰り返したい。

そもそも、人間が完全に把握することが出来るのは“ひとつのこと”だけであるのだと。

多数をそのまま多数として見るとき、主体は決して、それを自分のものにすることは出来ない。

それは何故かというと、主体が、多数のうちの“どれか一つ”を見たとき、どうしても「残っている他のもの」が、主体の認識から零れ落ちてしまうからだ。

我々は常に“ひとつ”だけを認識することが出来る。一つだけを“責任をもって”認識することができる。

換言すれば、その一つ以外は、認識するにあたって、どうしても“曖昧さ”という雑味を含んでしまう。そうなれば、もはやそれは認識の名にも値しない。

だから問題は「何をもって、それを一つと感ずることが出来るか」なのだ。

じつに、どの座標にあっても「天は二物を与えない」という言葉は真理である。アルベド侵入の後期では、私は次のように言った。

*問題の枢要は、多を一つとして認識できるかどうかなのである。多を一つと認識し、慢心から逃れて平静を手に入れる。

そして、そのように多を一つとして感ずるところには、天の恵みが持続して与えられる。そのとき主体は、まさに尽きることを知らぬアルベド侵入に恵まれるのである。*

けれども、いま主体の眼前に広がっているのは、多数どころではなく“無限”なのである。

その無限を前にしたとき、ただそれを「圧倒的な多数」としか見られない者に、どうしてそれを「把握すること」など出来よう？ どうして平静でいられよう？ どうして真のグノーシスなど出来えよう？

結局、無限を“一つ”として見られないならば、彼は広漠なる「圧倒的多数」を前にして立ち尽くすしかない。わが身の小ささに一切の自信を失い、泣いて焦って押しつぶされるしかない。

それでは、この段階にあっては何の意味も為しはしない。

となれば結局、アルベドとの合一に意義を持たせようとする主体は、そこで「無限を一つとして認識する」しかなかったのである。

(3) 自他一体という救い

私は何を数えているのか

かくして主体の認識のなかで、アルベドの無限は“一つのもの”として包括された。そして、無限に含まれない存在はないので、無限とは「存在そのもの」でもある。

しかし、相手が「存在そのもの」では、考察の対象としては、あまりにも抽象的にすぎる。実際ここまで対象が抽象的だと、読者としても、そこから何を読み取るべきか、よく分からなくなってしまうだろう。

そこで私は、自分自身にあえて「お前は存在の、もっぱら何を数えて無限と言っているのか？」という問いを立ててみることにする。

つまり自分自身に向かって「お前はさしあたって何を数えて、それを無限大にまで拡張して考えているのか」と問うてみるのだ。

そうしてみると、かかる問いの答えは「個性である」ということになるだろう。私は数多の個性を数えて、それを無限大にまで拡張して眺めていたのだ、と。

この個性とは、座標5の「自我の確立」で生じたものである。模倣への集中を通して、また脱同一化、脱手段化を経て、主体が苦勞して生み出したものである。実際のところ、なかなか現世では生じようのないものである。

潜在的個性の保存庫

しかし、これが“潜在的には”全人類分、ちゃんと存在しているのだ。

まだ顕在化はしていないが、たとえば「教育の段階」にある者の個性も“潜在的には”どこかに存在しているのである。どこかに、たしかに存在している。

では、その潜在的個性とやらは、どこに保存されているのだろうか。

その答えが、まさに「アルベド」なのだ。

アルベドこそが、潜在的個性の保存庫であり、この座標（座標9）には、全人類の潜在的個性が、まるで冷凍保存のように、欠けたところのない、永年不動の状態で保存されている。

そして主体は、アルベドの体験中、この「全人類分の潜在的個性」と合一するのである。

個性とは異質性

個性とは、煎じ詰めれば結局「他人との異質性」に行きつく概念である。よって全ての個性は互いに相違していることになる。

前節の復習となるが、相違しているものは数えることが出来る。

そして、その個性が数えられて、数えられて、もはや数えようもないほどの「無限」に至るとき、主体はそれを、むしろ「一つ」として把握することが出来る。

上述のとおり、アルペドにおいては、まさにその“無限であるがゆえにこそ”一者性が認識されるのだからである。

そして無限の個性が、主体の個性をも含めて一つになるならば、各々の個性もまた「主体と一つ」ということになる。

これを単純な文章で表せばだ。要するに主体にとり「彼は私」であり「私は彼」であるということになる。

つまり他人と自分がイコールで結ばれるのである。これを哲学的には、彼我一体とか、自他一体という。

といっても、アルペド体験者が、現世に戻ってきて、他人になり切れるという訳ではない。

そもそも「他人」と「他人の個性」が別概念であるからだ。

同一化や手段化といった“オブラート”につつまれた人格（他人）が、その人の潜在的個性（他人の個性）とは、似ても似つかないことも往々にしてある。

そのように、目に見える現象としては、必ずしも一致しない「彼と私」ではある。

しかし、潜在的な個性の次元（アルペド）では、たしかに「彼は私」であるし「私は彼」なのである。

アルペドに定位しているならば、たとえば、どんなに残酷な地獄の悪鬼であろうとも、彼と私は一体である。どんなに接点のない趣味を持つ人物であっても、彼と私は一体である。

実際、アルペドの潜在的個性として相対せば、誰であっても、間違いなく「彼は私」なのである。それがアルペドにおける、自他一体ということなのだ。

妊婦の対称物

どうか思い出して頂きたいのだが、混在的一者の「妊婦」においては、母体と胎児は、肉体的に一つの存在だった。対象をさす主語は、母と子という二つの語句であるが、その肉体は一つのものだった。

よってある意味、このとき母は子であったし、子は母であったことになる。つまり「彼（母）は私（子）」であったし「彼（子）は私（母）」であったのだ。

ということは、混在的一者の「妊婦」は、まさに、アルペドにおける「彼は私」「私は彼」の、低座標における雛型だったことになる。

読者にあっては、
「上にあるものは下にあるものの如し。下にあるものは上にあるものの如し」
という『エメラルド板』の言葉。そして私の「ヘルメスの杖は、自我の確立を挟んで上下にシンメトリー構図を描く」という言葉を、今こそ思い出していただきたい。
すなわち妊婦は、現象世界にある私たちに、その存在形態を通してアルベドの真理（自他一体）を教えてくれる、無言の教師なのである。
私の妻も、妊婦であったときに、自分が一人であるのか二人であるのか分からない、と言った。
その何気ない「分からない」という言葉の重さ！ その重要性を、私たちは、この座標9において、嫌と言うほど思い知ることになるのである。

寂しさのない世界

いずれにせよ、あなたがアルベド体験者であるならば、あなたが嫌うあの人も、あなたが好んでいるあの人も、そこでは、あなた自身になる。親でも兄弟でも、赤の他人でも、誰であっても、そこではあなた自身なのだ。

これこそは、西田幾多郎の言う「絶対矛盾的自己同一」であろう。

もちろん、他人が自分というのでは矛盾も甚だしい。だが、この他人を自己と同一させる認識こそ、アルベド特有の包括的真実なのである。真実の彼我一体であり、真実の自他一体なのである。

そして、そのように彼我が一体であり、自他が一体であるならば、だ。あるいは、私が彼で、彼が私であるならば、だ。

そのような状態にあって、はたして主体は、そこに自身の“寂しさ”を見出すことが出来るだろうか。己の寂しさを、塵ほどの一片でも、そこに見つけ出すことが出来るだろうか。

ごく自然な帰結として、その答えは「否」である。

自他が一体であるならば、そこには孤独がつけ入る隙はなく、よって主体が寂しさを感じる余地もない。

いまや孤独は逃げさり、寂しさは消えうせた。それらは雲散霧消して、見事なまでに、影も形もなくなってしまっているのだ。

したがって、主体にとっての根源苦が、ここでまず一つ解消されたことになる。

根源苦の一つとは、すなわち「孤独 - 寂しさ」のことである。それが、アルベドの「無限にして一なるもの」という認識によって、完全に救済されてしまっているのである。

第2章 時間的に見るアルベド（永遠）

（1）時の付着物

過去と未来の創始

前章で見てきたように、アルペドを空間的にとらえたものが「無限」だった。すなわち「無限にして一なるもの」のことである。

それでは、アルペドを時間的に見ると、どのような姿に見えるのだろうか。

まず端的に言おう。アルペドを時間的に捉えると、それは「永遠」というものになる。

永遠とは何だろう？ それは、果てしなく時が流れていくさまだろうか。どこまでも、どこまでも、際限なく“時の流れ”が続いていくことだろうか。

いや、そうではない。それはイメージとしては浮かべやすいだろう。だが、いつかは死する人間が、そのように恒久的な時間全体を、体験することは不可能である。

そして、それでは話にならないのだ。なにしろ、アルペド体験者は、アルペドの時間的側面である永遠を、文字どおり“体験”するのだから。

先んじて言うが、永遠とは、いわば「時間の創造」である。過去の創始であり、未来の創始である。

しかも、その創造は、経過によって過ぎ去ることをしない。それは創造の瞬間を“フォルム”として、天にしっかりと固定している。

そうした不動不変なる「時の創造のフォルム」こそが「永遠」なのである。だからこそ現代を生きる私であっても、それを掴むことが出来たのだった。

……気づくと、表現が、やや文学調になってしまったようだ。しかし本書は文学作品ではないはずである。そこで、ここでは努めて即物的に、再び「永遠」を眺めてみることにしよう。

そうしてみると、まず目を向けるべきは「現在」——永遠という“時の形状”の中心核となる「現在」という要素ということになる。

そして現在とは、時間における「虚無」である。まずは、このあたりから検証を始めなければならない。

高速の紙芝居

世に、動画、アニメーションというものがある。動画という文字が示すとおり、それは何らかの手段によって、絵を動かすことを意味している。そして、

「少しずつ違っている絵を、連続的に画面に映し出す」

というのが、アニメーション作りの、その具体的な手法である。

とはいえ、絵そのものは、明らかに静止しているものである。もともと動いているものではなく、それ自体では止まっているものである。

この点で絵は「現在」を時の流れから取り出してみせた状態に、よく似ていると言えるだろう。現在もまた、純粋な状態では静止しているだろうからだ。

そして、アニメーション作品では、この静止した絵が、連続して映し出されることになる。一般的なテレビアニメだと、一秒間に8枚の絵が映し出される。

そのとき私たちには“本来的には”それが「高速の紙芝居」として認識されてよいはずである。現実にはそれは、自動的に絵がめくられる、高速の紙芝居であるのだから。

ところが、私たちは、動画をまさに“動いている絵”として認識してしまう。アニメーションの登場人物を、なめらかに動く、まるで「現に生存しているキャラクター」のように感じてしまう。

まことに不思議だが、そう感じずにはいられない。本当は「止まっている絵が、ただ連続して映し出されている」だけなのに。

過去という残像

これは私たちが「残像」を見てしまう生き物だから、起こることである。

残像——つまり、一度目にした映像が、視界から即座には消去されないということ。あるいは、しばらくの間、脳裏にその映像が焼き付いてしまうということだ。

それが残像と呼ばれているものである。テレビアニメの形式からすると、どうやら8分の1秒ぐらいは残像が残りそうである。

そうして残像が成立している時間が、静止しているはずの絵と絵を、セメントのように結びつける。非連続体を、連続体にする。

そのようにして、高速の紙芝居を、鑑賞者に「なめらかな動きの動画」として認識させるのである。

このような「残像」のあり方は、何も動画だけに適応されるものではない。CDのデジタル信号の連続を、なめらかな音楽として認識させる「残響」なども、残像と同種のものと言えよう。

ほかにも似たような事は、身の回りでいくらかでも起こっている。

というより、私たちは、もしかしたら、残像や残響なしに、何かを見たり聞いたりした事など、一度も無いのかもしれない。アニメーションやCDに接する時だけ、私たちの感覚様式がギアチェンジするとも思えないからである。

であれば、残像はつねに、かつ遍く私たちの目に映っているものである。

そして、そのように「つねに、かつ遍く」だとすれば、である。かかる残像は、時の流れという「現在という静止画の如きものの連続」にも働きかけていることだろう。

それは、逆に言えば「現在には、つねに残像が付着している」ということである。

さらに換言すれば、私たちは、残像なしに現在を見ることが出来ない、ということだ。いわばそれは、私たち人間にとっての、本来的な“さが”なのである。

未来を予期する

また私たちは、常に未来を予期している。

いや、それは「予知」などという大げさなものではない。ごく直近の未来を、慣性の法則や、因果的な“当たり前”のレベルで予測するだけの事である。

「腕を上げようとするれば、すぐに胸の高さあたりまで届く」

「一步踏み出せば、30センチぐらいは前に移動できる」

そういった、脳内で言葉にする必要もない、本当に“当たり前”の未来。このような直近の未来を予測することを、私はいま「予期」という言葉で表現している。

私たちが、こうした予期を行っていることは、あの「驚き」という感情が証明してくれる。

すなわち私たちは、予期という形で、ある一定の未来を規定しているのである。だからこそ、その規定以外の事態が急に現れると、どうしても「驚いてしまう」ことになる。

先の例で言えば「腕を上げようとしたら、肘が誰か当たった」としたら、私たちは驚いてしまう。きっとその時、ちょっとした声を上げずにはいられない。また、「一步踏み出そうとしたら、急に足がつって動けなくなった」としたら、私たちは驚いてしまう。きっと目を丸くして呻かずにはいられない。

それらの驚きが生じたのは、いずれも「予期せぬ出来事が起きた」からである。

予期が付着した現在

逆に、何の予期もしないのであれば、何が起ころうとも、私たちは驚かない。何らかの比較対象（予期）がない限り、私たちの心の中には、いかなる違和感も生じようがないからだ。

違和感のないところには驚きもない。これは、考えてみれば当然のことではあるまいか。

試みに、予期も違和感も持たない、そうした自分たちを想像してみよう。

そうしてみると、そのとき私たちは、何が起ころうとも動じはしない。それこそ、矢が飛んできて、鉄砲の玉が飛んできて、微塵も焦らない。

予期をしない私たちは、そうした目の前にある事態を、ただただ「受け入れざるを得ない現実」として、つねに従容として受け止めるだろう。危険を予期して、その事態から身をかわすなど、考えもしないだろう。

そうして矢や鉄砲玉がめり込み、私たちの体に痛みが生じるとき、はじめて「苦しみの反応」が生まれるはずだ。そのとき私たちは、初めて叫び声を上げるだろう。そうした

反応様式以外には、まったく選択肢がないからである。

したがって、実際の私たちがそのようではないこと。多くの場面で「驚いている」ことは、私たちがいつも予期（未来想定）を行っている、何よりの証拠なのである。

以上のことを一言でまとめれば「現在には、つねに予期が付着している」ということになるだろう。言い方を変えれば、私たちは、予期なしに現在を見ることが、どうしても出来ない、ということだ。

そして、残像のことを含めて総括するならば、私たちにとっての「現在」とは、結局つぎのようなものだと言えそうである。

すなわちそれは「過去の残像を見つつ未来を予期している、時間感覚の中央部である」と。

(2) 現在という名の虚無

現在の真の姿

前節で見てきたように、私たちが感覚している「現在」には、実際には常に「残像と予期」が付着していた。

そして、この付着物が、私たちの「現在」の真の姿を見ようとする目を、曇らせることになる。

すなわち、私たちが「現在」と呼んでいるそれは、実は純粋な「現在」などではないのである。それは余計な付着物がついた、いわば“脂肪つき”の現在なのである。

この錯覚からは、どんな賢人であっても、なかなか逃れられるものではない。たとえばロシアの文豪である、トルストイもまた、この「脂肪つきの現在」を見ているようだ。彼は言う。

* [過去という] 時は私たちの後ろにあり、また [未来は] 私たちの前にあるが、今このときには存在しない。

[過去と未来なる] 時間というものは存在しない。あるのはただ限りなく小さな現在だけで、私たちの生活はこの現在にしか存在しないのだ。

トルストイ『知恵の暦』より*

上のようにトルストイは、現在のことを「限りなく小さな現在」と修飾して語っている。

しかるに、限りなく小さいということは、そこに「無限小の何か」があるということである。繰り返すが「何かがある」ということである。

ではその“何か”とは何であるか？ と尋ねれば、その答えは、やはり「残像と予期」ということになるだろう。

そうだとすれば、トルストイが見ている現在は、やはり「脂肪つきの現在」ということになる。トルストイにして、いまだ「現在」の真の姿を見てはいないのである。

残像と予期の削除

それでは、ここで錯覚から逃れるための思考実験を試みることにしよう。

読者にとっては、一般に「現在」と呼ばれている時間から、そこに付着している不純物、脂肪分を削ぎ落していってもらいたい。

すなわち現在から「残像と予期」を削除していってもらいたいのである。

抽象的すぎて、イメージするのが難しいだろうか。確かにそうかもしれない。

しかし、難しくとも不可能ではあるまい。残像にしても、予期にしても、これらは実際には、現在に属していないはずの時間だからである。

現在というリアルからすれば、残像と予期など、結局バーチャルリアリティに過ぎない。そんなものなら、きっと消し込んで消し尽くせないことはないだろう。

手順としては、まず現在から遠いところ（遠い過去、遠い未来）から、残像と予期を消し込んでいこう。

そして、しだいに現在に近づきながら、順次「残像と予期」の削除を進めてゆく、と。そうやって不断に「残像と予期」を減らして、どんどん「現在」の範囲を狭めていくのだ。

その過程では、皆さんは、トルストイの言葉をも超越していかなければならない。

すなわち「あるのは、ただ限りなく小さな現在だけ」という言葉の“小ささ”を超えなければならぬ。また「この現在しか存在しない」という言葉の“存在”を超えなければならぬ。

そうして削除の過程を突き進んで行くのだ、小ささを超えた極地まで。存在を超えた「存在と非存在のきわ」まで。

恐ろしい答え

すると、恐ろしい答えが現れる。すなわち、何もないのだ。無、虚無なのだ。

私たちが普通に感覚してる「現在」—— そこから残像と予期を除くと、その残余物は虚無になる。いな、残余物などありはしない。ただ虚無なのだ。

私たちは今や「現在の最もリアルな姿は虚無である」と言わざるを得なくなるのだ。

これを仮に、数式で表してみよう。すると、

$$\text{現在} - (\text{残像} + \text{予期}) = 0$$

ということになる。そして、もっと一般的な言葉を使うならば、「現在から、過去と未来とを、すっかり取り除いてしまったら、もはや何も残らない」と言い換えることが出来るだろう。

これが、本章の最初に言った「現在とは、時間における“虚無”である」という言葉の中身である。

(3) 時間の真相

現在が虚無であること

かくして、純粋な「現在」が虚無であることが結論づけられた。

これまで私たちは、人生訓としてよく「過去を振り返るな。未来に期待するな。私たちには現在しかないのだ。だから、現在だけを見つめて、そこに全力を傾注せよ」といった事を言われてきた。

実際これに類する言葉は、誰でも聞いたことがあるだろう。前記のトルストイの言葉がまさにそうであるし、イエスもまた、「明日のことは思い悩むな。明日のことは明日思い悩めばいい。その日の苦勞は、その日だけで十分である（マタイ）」と言っている。

これもまた、言わんとしていることは「先を見るな、ただ現在だけを見よ」ということだろう。

そのように聖賢たちは「現在しかない」と言っている。

ところが、その「現在」を精査したところ、実はこの「現在」こそ無かったわけだ。それが冷徹なる“事実”だった。

存在の実感がある「現在」

しかし私たちは、決して「時間的な虚無」などを感じて生きてはいない。むしろ「今という時間」「現在という時間」が常に存在している、と感じながら日々を生きている。

そこには間違いなく「存在の実感」が伴っている。

ならば、そうやって私たちに「存在している現在」を感じさせているのは何なのか。これを明らかにしなければならない。

そこで、再び「現在」を考察してみよう。

すでに見てきたとおり、私たちが普段感じている「現在」というものは、「残像、現在、予期」という三つの要素によって構成されている。

そして、そこには存在の実感が伴っていて、なおかつ現在が虚無であることは確定している。

とすれば、そこに「存在しているもの」があるとすれば、それに該当するものは「残像」と「予期」しかない。現在は虚無であるから、どうしても「存在しているもの」の候補から外さざるを得ないのだ。

残像と予期——もっと一般的な言葉を使えば「過去と未来」である。したがって、現在を眺めるとき、そこに存在しているのは「過去」と「未来」しかないのである。

それは、あまりにも単純な答えだと言えよう。それだけに、この答えを覆すことは、まづもって不可能だ。これは、どうしてもなく固い事実なのである。

よってトルストイの「〔過去と未来なる〕時間というものは存在しない」という言葉は、究極的には誤りである。人生訓としては肯定すべきだが、事実を究明する上では、誤謬として扱わなくてはならない。

そう、実は、時間的に存在しているものは「過去」と「未来」のほうだったのだ。

時間の再構築

こうして既成概念が壊れた後での、時間のリストラクチャリング（再構築）が始まってゆく。

すなわち時間というものが、これまで感じていた「過去から現在へ、現在から未来へと流れてゆくもの」から、それとは全く違うものへと変化してゆくのだ。

一体どのようにだろう。今の私たちには、どのように「時間」が見えるのだろうか。

教えよう。それは「現在という虚無から、過去と未来とが放射されている」という形状なのである。流れていくのではなく、放射されるという形状である。

これが新しく再構築された、我々にとっての「時間」である。

しかし、この形状を知ることは、アルベド体験者特有の時間認識である。彼らだけが、この時間的真実に到達することが出来る。

座標9未満の意識段階に定位している者には、決してそこに到達することが出来ない。彼らは飽くまでも、流れる時間の先端に、現在というものが付いていると思っているのだ。

アルベド侵入を受けている者でさえ、かの“時の形状”を確知することは出来ない。彼らはそれを予感するだけである。ただアルベド自体の体験者だけが、時の真相を知ることになる。

どうしてそうなるのか。それは対象となるものが、あまりにも小さいからである。

残像にしても予期にしても、それらは恐ろしく極小のものである。虚無ならば、なおさらのこと目に見えないだろう。総じて、それらは極めて量子的（＝超極小的）な対象なのである。

だから、普通の視力では、とても捉えられない。そして、そのように“見えなければ”、問題意識もまた、発生のしようがないのである。

しかし、アルベド体験者にとっては、過去と未来は、べつに量子的でも何でも無い。いくらでも彼に見えるものであり、むしろ極大のものである。これが心の目に映らない、などということは絶対にあり得ない。

では実際のところ、彼は何を見るのか。それを以下で描出していくことにしよう。

虚無的現在にシンクロした主体

できるだけ、アルベド体験者が見るものを正確に伝えたい。そのために、ここで一旦「主体に恩寵の原理が働くところ」まで場面を遡ることにしよう。すなわち、座標 8, 9 にあたる「アルベド直前」の場面である。

さて、先の考察の結論として、真の現在とは“虚無”であった。

この事実は「恩寵の原理」の只中にある主体に、きわめて大きな影響を与えることになる。いや、主体自身は、そうやって影響を受けていることに関して、まったく無意識であるけれども。

いずれにせよ「現在が虚無である」という事実が、その事実のゆえに、主体の心から、しだいに過去と未来を奪っていく。

見よ。私たちは日常生活でも、つねに現在を生きるしかないが、その最もリアルな「現在の姿」が、恩寵の場面では剥き出しになる。

そのとき主体は、遠い思い出や、先々の見通しなど持ち得なくなる。それどころか、普段通りの記憶や、明日の予定も消えていく。

そしてついに、僅かばかりの残像や、些細な予期すらも、主体の心から奪われてしまう。つまり主体の時間のなかに「虚無」が現出するのだ。

よって、その時の主体には、過去を振りかえる余裕も、未来を想う余裕もない。彼を支える時間の全てが、奪われているからだ。いわば暗闇の時間点だけが、そこにあるのである。

これこそが、虚無的現在にシンクロした主体の、その最も生々しい姿だと言ってよいだろう。

まさに時間ゼロ、余裕ゼロ、の状態である。

そして、そのように時間的な虚無に落ち込んでいるからこそ、根源苦の時間的感情である「虚しさ」が、主体の心に溢れるのだとも言えるだろう。

虚無的な主体と「永遠」との出会い

そして、これほどにも虚しい存在だからこそ、かの恩寵の原理によって、アルベドは、主体に引き寄せられる。

その虚ろで無力な状態が、アルベドの母性本能を喚起するがゆえに。すなわちアルベドの中に「弱々しい彼を守ってあげたい」という気持ち呼び起こすがゆえに。

そうして主体は、アルベドと合一する。現在という時間的虚無を“狭き門”にくぐらせながら、アルベドの「永遠」に到達する。彼は「永遠」に、吸収合体させられるのである。

これが「恩寵の原理」の、時間的側面における流れである。

何とも可哀そうな経緯ではあるが、どうしても、そのようにならざるを得ない。なに

しろ「流れる時間」と「永遠という時間」との接合点は、唯一この「虚無としての現在」しかないのだから。

そして、この「虚無としての現在」が、根源苦に覆われている次元から、アルペドの次元にアセンション（次元上昇）するとき、驚くべき奇跡が起こる。すなわち、そのとき現在の意味合いが、大きく更新されるのである。

もっとも現在は、依然として時間的虚無でしかない。しかし、それがアルペドに組み込まれると、虚しき現在が転じて、偉大なる「永遠」の中核部分へと、その役割を変えるのである。

(4) 永遠の姿

無限存在の残像と予期

アルペドに合一した主体は、空間的に見れば「無限にして一なるもの」である。

これは前章「空間的に見るアルペド」における結論であり、換言すれば、アルペドである主体は、そのとき「存在そのもの」であった。

そうした「存在そのもの」である主体に、いまや残像と予期が復活する。根源苦に覆われていたときには奪われていた両者が、アルペドの次元では再び甦るのである。

ただし、この時の「残像と予期」は、アルペド以前の「一個人における残像と予期」とは、まったく規模が違っている。

それはまさに「存在そのもの」の残像であり、「存在そのもの」の予期なのである。存在そのもの、では分かりづらいというのなら、それを「人類の」と言い換えてもかまわない。

それだけに、いまや「残像と予期」では、言葉としてのスケール感が足りない。

すなわち、それが人類全体の巨大な、個人史が絡み合って複雑となったものの残像であるならば、それはもう「歴史」であろう。これを残像と呼び続けるには無理がある。

また、それが人類全体の先々を遠望する、個人史がひしめき合うような緻密な予期であるならば、それはもう「予知」であろう。これを予期と呼び続けるには無理がある。

そして、むろん歴史は過去にあり、予知は未来に属している。

したがって、それが歴史と予知であるならば、それらを、より一般的な言語によって「過去と未来」と呼んでしまっても差支えないだろう。

というより、そう呼んだほうが適切ではあるまいか。結局そこでは、歴史以外の過去もなければ、予知以外の未来もないのだから。

超極大の「時間」

実際にアルペド体験者となってから見てみると、その過去と未来が、まさに超極大の「時間」であることが分かる。個人の残像や予期のように、量子的なものでは全くない。

もちろん主体に、これが見えないはずがない。だからアルペド体験者は、この超極大の「時間」を目の当たりにして、その形態を容易に掴み取る。そして、その形態こそが、「現在という時間的虚無から、過去と未来が放射されている」

という姿なのである。これが最も端的に表現した「永遠」の姿でもある。

それは勿論、ただ単に、過去と未来が、現在を挟み込んでいるのとは異なっている。過去と未来とは、現在によって“創られて”いるのである。

ところで、すでに私は「時間的に存在しているものは『過去』と『未来』のほうだったのだ」と明言している。そして、その両者の中央には、虚無であるところの現在が鎮座している。

哲学者のプラトンによれば「在る」と「無い」が弁証されると「成る」に総合されるといふ。ここで起きていることは、それと同じようなことだ。

つまり「存在」と「虚無」とが弁証されて「創造」という新たな相が現れたのである。

現在という虚無から、過去と未来という「存在の光」が双方向に放たれている。それは過去の創始であり、未来の創始である。そしてまた、それらの創出の起点としての現在の姿である。

これが、アルベド体験者が見る時間である。そして主体は、この時間の相を観じて、これを「永遠」と呼ばざるを得ないのである。

第3章 永遠の諸相

(1) 永遠の相似形

時の形状

永遠についての話を続けるが、話が長くなってきたので、章を改めることにしよう。

ここで時の形状について語っておきたいと思う。というのも私には、時間にも象徴的な「形」があるように感じられるからだ。

まずは、いま論述の対象となっている「永遠」について。

もともとそれは、一次元の、つまり直線としての時間である。よってアルベドの永遠は、その形状として、始まりも終わりも持たない「直線」を描くのである。

なお、そのように「始まりも終わりも持たない」のは、この直線が、線分の中央から「放射」されているからである。

つぎに「流れる時間」を見てみよう。

この流れる時間は、永遠（直線）の無始無終とは異なり、始まりと終わりを結んだ「円」を描くことになる。

かかる流れる時間を体感するのは、主に「自我の確立」の段階にある者たちである。

それに対して「教育の段階」では、時は、ただ勝手に「過ぎていく」ばかりだ。その主体に確知されることのない時間は、どこかしら歪（いびつ）な円を描く他はない（座標2～4）。

また、自我確立者にとっての「始めと終わり」は、基本的には自己の生と死だけである。

それに対して、教育の段階では、生活上の「似たような形式と内容」が短いスパンで繰り返されることになる。つまりそこでは、時間のループ化、ルーティン化が起こるのである。

これにより教育の段階では、時間的な「始まりと終わり」が何度も繰り返して訪れることになる。年末年始、月初めと月締め——このような言葉が、その短い「始まりと終わり」を象徴的に表現している。

殊更にそうしたルーティンの生活が極まれば、彼らは疲れ切った顔をして「毎日が同じことの繰り返しでしかない」と嘆き呟くかもしれない。

それは時の形状として見れば、同じ形の小さな円が、一か所に積み重なることを意味している。こうしてコンパクトに片付けられた円は、自我確立者の円に比べて、いかにも小さなものとなるだろう。

広がる円周

つぎに「アルベド侵入」の段階における、時の形状を見てみよう。これも、もちろん象徴的な話である。

この段階では、自我的な「流れる時間」が、永遠である「直線」の影響を受けて、その円周を広げていく様子が見られる（座標6～8）。

つまりアルベド侵入は、永遠の侵入、直線の侵入でもあるわけだ。

そして、円が広がり円周が長くなれば、その円周は直線に近づく。たとえば、地球が丸いのに、古代人がそれを平面だと思ったのは、地球があまりにも大きいからに他ならない。

そのように「流れる時間」の円周が長くなることにより、アルベド侵入の段階では、象徴的に「始まりと終わりが遠ざかる」ということが起こる。

とりわけ芸術作品に明らかだが、こうした場合には、長く鑑賞しても飽きが来ず、いつまでも新鮮さが持続する作品が生まれる。

何故ならそこでは「飽き」という終わりが、作品の成立という始まりから、遠ざかっているからである。

換言すれば、アルベド侵入を受けた主体の芸術作品は、そのとき「古典」となるのである。

もちろん、アルベド侵入という恩寵を受けた主体自身、つまり「カリスマ的人物」にも同じような現象が起こりうる。つまり、彼の人生という円環も、また直線（永遠）の影響を受けるということだ。

結果、彼の人生は、上述した「古典」と、優れて同じような様相を帯びることになる。

すなわち彼は、ずっと長期にわたって、そのカリスマ的な影響力を保持するのである。場合によっては、彼の肉体的生命が滅んでしまった遙か後であってもそうであろう。

不死の感情と無時間性

しかしながら。かの「永遠」に最も似ている時間の形状を、アルベド以外の座標で探すとすればである。

それはやはり混在的一者（座標1）の座標でこそ、見つかるのではないだろうか。それこそ空間軸の「妊婦における自他一体」と同様に。

では以下に、その座標1の様子を見てみよう。

そこでは、母親となった女性が、その思い（イメージ）の中で、過去に向かっては自分の母と、未来に向かっては自分の子供と「生命の共有」を果たしている。

これは勿論、あの永遠という放射状の直線の形状に似ている。中央に存する母親が、その生命の両手を、過去と未来に向かって、放射状に伸ばしているのだから。

そして、これによって生まれるのが「不死の感情」である。いわば「私はずっとそこにいたし、これからもずっと、そこにいるだろう」という気持ちである。

この不死の感情が、女性（母）の、あの言い知れぬ安定した心持ちを支えることになる。それはまるで、盤石の地に腰を降ろしているかのような、あの「生きていること」についての安定感である。

これは、子を孕むことなき男性には、決して持ちえぬ感覚だと言えるだろう。それゆえ男は、その性情として、女性よりもずっと“動的”にならざるを得ない。

したがって彼に、地に足がついた不変性（落ち着き）を求めるのは酷と言えよう。

男とは、不断に死を感じずにはいられない生き物なのである。死から逃れようと動き回り、無闇やたらと足掻かずにはいられない生き物なのである。

もっとも、ここに見ている女性の「不死の感情」は、当然のこと、かの「永遠」ほどには、緻密に彫琢されていない。

だからそれは、永遠よりもずっと曖昧な“無時間性”といったものを、座標1に住まう彼女に感受させるに留まるだろう。

とはいえ、ここに見る女性（母親）の心が、時の流れの彼岸に立っていることは、ある程度までは真実なのである。

ゆえに、そんな彼女を、外から眺める者がいるとするならばである。

その時には、その観察者は、彼女が時間の流れに逆らい、本当にずっと「そこに留まっている」かのような幻想に陥ってしまうだろう。そこには、まさしく「恒久的な現在」があるからだ。

ニーチェの永劫回帰ではないが、彼女（母）の存在は常に、そこに戻ってくるのである。

女性としての彼女になら、時間的变化（流動性、自我性）はあるだろう。しかし母となったときには、つねに彼女は、無時間的な“そこ”に戻ってくる。

このような母性の無時間性は、時の流動性の虜になっている男たちにとっては、まさしく時の深淵を覗くような神秘となるだろう。

(2) 時の所属

過去も未来も現在に属する

話を「永遠の姿」のところまで戻すとしよう。

すなわち「現在という虚無から、過去と未来という『存在の光』が双方向に放たれている。それは過去の創始であり、未来の創始である」というところまでだ。

こうした「永遠」にあっては、過去は現在によって放射されているものであるし、未来もまた、現在によって放射されているものである。

つまり過去と未来は、ともに「現在」の自己表現であり、「現在」の自己展開、自己投影なのである。この事実をもって、私たちは、

「過去も未来も、現在に属している」という言い方をすることが出来るだろう。

そのためアルベドの体験中には、主体は、過去と未来に関して、何の懐疑も不安も覚えられないという「全知感」が味わえる。

さらに言えば、主体は、空間的には、いま全人類と自他一体の状態にあるのだから——その「全知感」は、まさに人類を導く、神の如きものであるとさえ言える。

つまり、そのとき主体は「人類についての過去と未来」をすべて知る超越者となるのである。

このような全知が、地上の人間に「アルベド侵入として」恵まれるとしよう。そうすると、そのアルベド侵入の受容者には、

「現在にあって、人の知らざる過去が分かり、現在にあって、まだ来ぬ未来のことが分かる」

ということが起こる。それは例えば「過去透視」や「未来予知」といった言葉で表されているような能力である。

すなわち「永遠」の受容者は、失われた過去を知る神秘の人となり、また、まだ見ぬ未来を知る予言者となるのである。

予言の根拠

まず未来のほうを見るなら、要するにアルベドの永遠は「予言という超常現象の根拠」なのである。

つまり主体は、現在にあって「その現在に属している未来」を見るのだから、これによって、未来予知ということが可能になる訳だ。

もちろん、アルベド侵入というものは、アルベドの内容が、その本来的なテリトリー（座標9）を離れる現象ではある。そうやってテリトリーを離れることによって、下位座標（座標6～8）に侵入する、と。

したがって、そこには、どうしてもアルベドの内容についての「純粋性の低減」の宿命がつきまってしまう。

*アルベド侵入としてのアルベドの内容は、どうしても、その十全性を低減していることになる。それは、テリトリーを離れてしまったアルベドにとっての宿命である。

すなわち「無限、永遠、救済」は、いまや「なかば無限的なもの、なかば永遠的なもの、なかば救済的なもの」となってしまったのである。

『第二福音書』アルベド侵入の起点より*

つまり、アルベドにおける完璧な「永遠」が、そこではもう、ちっとも完璧なものではなくなってしまっているわけだ。

それだけに、アルベド侵入による予言、未来予知には“ハズレ”が付きものとなる。要するに、どんなに有能な予言者であっても、その予言正解率が、どうしても何割減かはしてしまうのだ。

また、何となれば私は、予言を外れさせる要因を、もう一つ挙げることも出来る。しかし、それについては、座標10のルベドで語ることになるだろう（「神に干渉する人間像」の章）。

現時点で言うべきことは、とにかく、予言には、確かにその事象を成立させる根拠があるということである。そして、その根拠こそが、アルベドの「永遠」なのである。

質感に過ぎない過去

つぎに過去に目を向けてみよう。

そうしてみると、アルベド体験者が「永遠」を知ったとき、彼が過去というものの対して持つ認識は、概して次のようなものになる。すなわち、

「それは結局、現在を生きている自分が生み出す“質感”に過ぎない」

あるいは、

「過去とは、現在が遡求的に行う“解釈”に過ぎない」

ということである。

過去（歴史）という、チューブのような時間的実体があって、そのチューブの先端に“現在”が付いている。それが流れる時間を生きている人間の、その「過去と現在」についての認識である。

しかし、アルベド体験者は、それが単なる錯覚でしかないことを知っている。彼にとっては現在こそが、過去の起点であり、過去のスタート地点であるのだから。

そのため、アルベド侵入のレベルであっても、次のような事がおこる。

すなわち、アルベド体験者が、眼前にある人物の“現在”を見たとする。すると彼には「その眼前の人物が、これまでどういった人生を送った」かが、何となく直観的に分かってしまうのである。

つまりアルベド体験者にとっては、対象となる人物の過去を、現在から遡求的に解釈できてしまうのだ。

そこでは「過去を知らなければ、その人の現在など分かるはずがない」などという一般的な人物解釈は、もはや意味をなさない。なにしろ現在という鏡には、過去のすべてが質感として映っているのだからである。

それは確かに、アルベド侵入のレベルでは、その読み取りに“識別の甘さ”が残るだろう。

しかし、もし彼が「その認識力だけ、現象界でも、アルベド自体に定位してられる」と仮定すればである。

間違いなく、その現在という鏡には、対象となる者の過去すべてが、質感として映っているはずなのである。

(3) 虚しさからの救済

虚しさのない世界

私は第1章において、空間的にとらえたアルペド、すなわち「無限」をして「それは寂しさのない世界である」と述べた。

ならば、時間的にとらえたアルペドはどうだろう。

永遠と呼ばれるそれは、ここに合一する主体の感情を物差しにした場合、果たして、どのような世界であると規定することが出来るだろうか。

その答えは「虚しさのない世界」である。

確かに、永遠のうちにも虚無は含まれている。虚無としての“現在”は含まれている。

しかし、それは根源苦としての「主体の心に何も残らない」という意味での“虚しさ”とは、全く別のものである。

人間の誰もがそうであるように、ここに見ている主体も現在を生きている。しかしアルペドの永遠に定位しているとき、主体を含む現在は、つねに過去と未来とを、自己から放射している。

そしてそれは「主体が現在にあること」が、同時に「過去と未来を併せ持っている」ことを意味しているのである。

失われるものがない

流れる時間のもとでは、主体が現在に手にしていたものは、やがて過去のものとなってしまった。時間の波に押し寄せられ、遠く、遠くへと運び流されていってしまった。

そのため、かつては固く握っていたものにも、その手が届かなくなってしまった。そして結局、主体の手には、何一つ残されるものもなかった。

とくに「若さ」や「栄光」や「命」が、手の届かない対象となっていくのは惨めだ。あまりにも惨めで辛い、虚しいことだ。

あんなに若かったのに、あんなにチャホヤしてもらえたのに、確かに生きていたのに、それが全て過ぎ去って無くなってしまおうとは！

「何という空しさ、何という空しさ、すべては空しい！」

一度は栄華を極めたソロモンが、そのように嘆くのも無理はない。

しかしである。アルペドにおける現在は、永遠における現在は、つねに「過去を併せ持っている」のである。過去の起点が、つねに現在にあるのである。

よって過去は、現在の手から逃れられないし、遠くへ過ぎ去れもしない。

そうだとすれば、いったい何が、彼のもとから失われるというのだろう。換言すれば、主体の手から零れ落ちるもの、主体に「それは残らない」と嘆息せしめるものが、何かあるだろうか。

結論を言えば、そんなものありはしない。永遠という時間の中では、何かの喪失に出くわすことなど、絶対にあり得ないのである。

だから、そこに“虚しさ”は存在しない。言い換えれば、永遠とは「虚しさのない世界」なのである。

不滅の命

アルベドの永遠において、主体から過ぎ去るものがないとすれば、彼の命もまた、過ぎ去ることがない。つまり主体の命は不滅なのである。

そして、そうした不滅の主体が、アルベドとの合一から離れて、地上における日常生活に戻ったとしよう。

そして地上における「流れる時間」のなかに、ふたたび生滅必然の理を見たとしよう。

すなわち彼が「時間が流れれば、生起した物事は、必ず衰滅する」という、この世における、厳然たる自然の摂理を、改めて見たということである。

そうなると主体は、思想的に「その必然的な生滅と、永遠における“不滅”とを、整合的に組み合わせること」を余儀なくさせられる。

もちろんそれは、彼が、アルベドと合一していた時の記憶を、部分的にでも保っていればの話ではあるが。

そして、こうやって主体のなかで生まれる教説こそが「転生輪廻」なのである。つまり、不滅の生命が、生まれては死ぬことを繰り返す、ということだ。

もしも不滅なものが無いならば、命は“死”という形で、ただ過ぎ去るだけだろう。つまり「生と死」が命の全てであろう。

けれども、そこに不滅のものが在るならばである。命は決して、そのように過ぎ去ったままで終わりはない。

すなわち、不滅なものが根本設定されることによって——この世という舞台における「生まれては死ぬ」という現象が、然るべき“補完”を受けることになるのだ。

それこそが「死んでは生まれ変わる」という補完——この世から見ると、舞台裏にあたる「あの世」での補完である。簡潔に言えば「死と再生」だ。

そして、この「生と死」「死と再生」「再生と死」「死と再生」が繰り返されて、いわゆる「転生輪廻」が成立することになる。

虚しさを打ち消す転生輪廻

私が語っているのは、ヒンドゥー教や仏教で語られている転生輪廻の、その最もシンプルな機構の解説である。

たしかに、キリスト教では、転生輪廻にあたる教えが、ほとんど説かれていない。

それだけに、クリスチャンの中には、私の言葉が「危険で異端的な教説」「見知らぬ異教的な教説」としてしか、聞こえない者も多いことだろう。

しかし再臨のキリストとして、私は、転生輪廻が確かに「真実の教えである」と断言せざるを得ないのである。

それは私にとって、誰かから教示された説話ではなく、私自身のアルベド体験から導出された“帰結”に他ならないからだ。

それに、キリスト教圏であっても、有名な霊能者である、エドガー・ケーシーなどは、トランス状態で、相談者の前世を口述していた。

これは過去透視の一種であり、超心理学的には「前世リーディング」と呼ばれている。

そしてもちろん、生まれ変わりがなければ、前世などは存在しない。ケーシーが前世リーディングを行えたのは、ごく単純に、輪廻転生が事実だからではあるまいか。

かく言う私自身、アルベドにおける「永遠不滅」と、流れる時間における「生滅必然」の両方の摂理を知る者として、どうしても転生輪廻説を支持せざるを得ないのである。

そして、転生輪廻の考えのもとでは、若さは何度でも訪れる。さらに壮年を迎えれば栄光も掴めるし、命そのものも何度でも与えられる。

つまり、失ったものは、また与えられるのだ。だとすれば、そこに虚しさが入り込む余地など全くない。

悠久なる時間の確保

そして、その転生輪廻によって確保された悠久の時間は、まさに人類が、アルベドに到達するための修練期間として使われることになるのである。

畢竟、一度かぎりの人生では、アルベドに到達できない人がほとんどだろう。

だが人が、何度でも何度でも、繰り返し生まれ変われるのならばどうか。その場合には誰にだって、アルベドに到達することが可能になるのではないだろうか。

第1章で見たように、全人類の“潜在的個性”は、確かにアルベドの無限のうちに保存されている。そしてアルベドは、時間的に見れば、永遠に他ならない。

そうであるならば、潜在的には、全人類が、アルベドの永遠と結びついている事になる。つまり誰もが「不滅の生命」を持っている事になる。

ということは、どんな人にも、転生輪廻の宿命と、悠久の時間とが、差異なく与えられているという事なのだ。

生まれ変わりがながら、果てしなき悠久の時間を生きている私たち。その、生き続ける目標である「永遠」への到達——そのことを知っただけでも、私たちは「虚しさのない世界」への参入を果たしているとも言える。

そう、命は過ぎ去るだけではない。何度でも生と死を重ねて、アルベドを目指すことができるのである。そこには虚しさとは無縁な「命の充足感」があると言えよう。

そしてまた、アルベドの永遠を体験している最中の主体ならば、わざわざ転生輪廻に思いを巡らすまでもないのだ。

その瞬間において「永遠不滅の自分」を認められるアルベド体験者——彼はまさに「虚しさのない世界」を、100パーセント、いま如実に体感できているのである。

再臨のキリストによる福音書 3-1

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
